



古谷錦洲句集

自筆本

全

内外不出



筆
自筆跋畧

此書乃其自筆也

因耽免其由也

此書乃其自筆也

此書乃其自筆也

○佳福園 古谷氏
 ○古谷錦洲 初名八龜 濤 函館 後札幌二居也
 大孤 = 學心 後羽後 弄月庵 吟風 = 開事
 東京ノ春秋庵 軒雄 同松江ニ問フ 明治三十
 九年十二月三十日歿ス
 ○本書ハ其自筆ノ句集ナリ 題ニ三句筆ト云
 ト曰フ

初のそ昔をそ時一暮夜を
先をようなれぬく飽きをさうれた
り

古石氏名月むを弄て風流
しきくを葉かけし〜も
平和のうちをさめ〜をん
るおり〜をゆ〜を
弊る時を名を考て〜を
ふり〜をあ〜をゆ〜を

龜濤

其外ニ送別會の
是外評

第1日の雪化や門うら

初七ふん明けのををををを

去五海とく休む思ひや竹ぬ人

志五らるるの江平横もやと秋

親舟を囲ををををを

其外新巻、移した
時蔵りの評

半日庵評

左評

松陰評

其外評

司最齋評

左評

其外子面別會の
是外評

其外子送別會の
是外評

左評

うら風の言り吹り神の節

第1日ものくさぬ阿や新さくら

初五ふんや水ようりそ

親舟を何れををををを

貫もせぬ人うたや初七松魚

初七の日は三ををををを

席五杖や座んとうりの数や

初七うゑて月を相合の接酒

初七ありて松引ををををを

初五うゑてうら向ひ

園扇うぶ心しのうづる名所草
 呼留て義の夢を覚ひりり
 新麦や草鞋もかぬ^{（音）}字ふある
 新麦干戸口^在戸^在町^在草
 會釋して常々^{（音）}きり^{（音）}交^{（音）}少
 と^{（音）}海^{（音）}の^{（音）}流^{（音）}の^{（音）}交^{（音）}り^{（音）}活^{（音）}水^{（音）}の^{（音）}舟
 鳴^{（音）}る^{（音）}干^{（音）}の^{（音）}傾^{（音）}ぬ^{（音）}果^{（音）}古^{（音）}を^{（音）}
 白^{（音）}布^{（音）}れ^{（音）}を^{（音）}涼^{（音）}し^{（音）}て^{（音）}き^{（音）}て^{（音）}交^{（音）}の^{（音）}際
 実^{（音）}を^{（音）}と^{（音）}め^{（音）}ま^{（音）}付^{（音）}や^{（音）}あ^{（音）}う^{（音）}て^{（音）}海^{（音）}の^{（音）}舟
 園^{（音）}干^{（音）}水^{（音）}を^{（音）}け^{（音）}を^{（音）}き^{（音）}や^{（音）}交^{（音）}の^{（音）}際

水草のゆきまきや^{（音）}交^{（音）}の^{（音）}際
 裸^{（音）}の^{（音）}流^{（音）}き^{（音）}ま^{（音）}う^{（音）}づ^{（音）}る^{（音）}以^{（音）}移^{（音）}哉
 深^{（音）}水^{（音）}を^{（音）}眠^{（音）}れ^{（音）}き^{（音）}干^{（音）}の^{（音）}交^{（音）}の^{（音）}際
 空^{（音）}風^{（音）}干^{（音）}吹^{（音）}きて^{（音）}れ^{（音）}し^{（音）}は^{（音）}稻^{（音）}川
 稻^{（音）}育^{（音）}つ^{（音）}き^{（音）}れ^{（音）}を^{（音）}わ^{（音）}き^{（音）}や^{（音）}一^{（音）}夜^{（音）}極
 宿^{（音）}り^{（音）}ま^{（音）}尾^{（音）}に^{（音）}出^{（音）}し^{（音）}て^{（音）}一^{（音）}夜^{（音）}極
 友^{（音）}舟^{（音）}干^{（音）}投^{（音）}網^{（音）}ら^{（音）}た^{（音）}き^{（音）}て^{（音）}舟^{（音）}遊^{（音）}ひ
 杉^{（音）}竹^{（音）}干^{（音）}風^{（音）}の^{（音）}香^{（音）}も^{（音）}れ^{（音）}し^{（音）}て^{（音）}舟^{（音）}遊^{（音）}ひ
 何^{（音）}ぞ^{（音）}い^{（音）}ゆ^{（音）}き^{（音）}舟^{（音）}の^{（音）}櫂^{（音）}や^{（音）}い^{（音）}づ^{（音）}つ^{（音）}つ^{（音）}つ^{（音）}
 舟^{（音）}中^{（音）}の^{（音）}中^{（音）}や^{（音）}の^{（音）}き^{（音）}ん^{（音）}く^{（音）}牛^{（音）}一^{（音）}車^{（音）}

在外坪目五

合上
良夜の年月

系評

校規中主款

調や、島の木蔭の山々く
 調や、出舟を解る、院此所
 前市や、年寄達久しう
 多左の夜た、ゆるし、空と
 晴るの、欲す、更夜や、目々
 在、風を、川を、禁て、碇り、如
 葉、花を、や、松、柳、を、あ、り、さ、ま
 柳、花、を、や、夜、風、を、さ、ら、と、比、と、雪、の、

七 五 五 五 七 五 五 七

○

明、治、三、十、一、年、二、月、二、日、禁、煙、の、令、に、依、り、
 禁、煙、令、に、入、負、ま、す、御、手、を、錦、海
 と、改、め、廿、五、年、九、月、十、日、東、京、舊、見、の、
 倫、を、入、負、

廿五年九月十日
 法部新藤部
 稗題
 細編金松江撰
 目三十三字
 香楠在左撰
 目三十三字
 四編新法部新藤部
 今 五題

漸、あ、り、て、当、列、の、つ、や、交、の、山
 稗、田、も、勅、語、の、あ、り、て、春、の、秋
 磨、の、子、の、移、葉、を、見、あ、り、く、秋、意、を、
 さ、し、緒、を、輕、く、き、蟬、の、こ、ろ、を、さ、し、
 明、方、や、露、の、た、ち、あ、り、あ、き、の、や、ま、
 坐、下、つ、ひ、て、山、の、麓、を、さ、ら、の、葉、の、

七 七

細鏡全撰
目五

秀柿在撰

諸品新考

細鏡全撰

酒の味をばいと毒も味付く事
 其の名を押して問をくは花野草
 菓を盆にりけさして阿り其の志
 きてれ一の西瓜を袴ゆりしを
 雲下りまう立て真りたる日初ら
 耳うとく本て頭中の似合幸也
 貞しき鎖を備へつはまら
 幸ひしり舟もあり直は新海
 十月や何を志るも日々をした
 里家たふてるあふき来る小見卦

七 五 七 五 七 五

諸品新考

直題

松江撰目五

三十字

高左撰
巻袖

諸品新考

直題

松江撰
目五
三十字

乃々うちよ山の半を討る事
 焚けし柴もも此の冬う焼
 米くさる暇あきりや節季候
 松ふらやあま啼く夜也登ひし
 池津あを座をさひたり落る時
 小餅さしとらぬ少也や並ふ時
 埋まぬは煙りをうそと紙の電
 第よ又ぬ窓のまよりり松の由
 門松を榮ゆる代の志る一可也
 馬あらし盟の湯氣や梅かた

七 五

香印石硯 日立

諸島形夢 千路沼河

五五題

杉江撰 日立三十字

尚た撰 全

三十字

遠くさき空の出入や 松のうち

流き深く氷よやまむ 臘席うら

葉の味も水の種も うたげやせ

貫つた畑見ながら 社白詣りや

あま見ると海先の松乃夕可也

雪とけや霧の尾ひく溜り水

松風よ夢も流るり 空念佛

晴明や水もた月の夜ぬく

今朝の富士こころ百千昇る 初り哉

福引や空念なき児の 事報籤

一

一

一

一

一

一

一

一

本歌今 十七字系
松平尾柳 二行系

全 梅正舎撰 三光三行

名 桂窓三人撰

杉江撰 全

岩陰平火を焚けて 小籠飯

蓬萊の影さし 乃る桂う那

理れぬを煙りもろくを 龍の山

昂るももるもハを 山成る

結きとや 比る百 娘の女

神おくる姿り 雲に 飾るや

空を 風夢の 志を 神送り

日影入りや 海おたゆに 成る山

枯葉をもちよ 人あり 山成る

れつうさきの 空を 月と 成る

月影あり
空の空あり

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

細路全撰

指月庵撰

岩谷河

以倫雅志
清原秋房

全
五題

田の上や一匹道の所や雪のくれ

白葉にちりりうれつく霜のくる

赤いよて数つて居るや白葉の

永きりや時計をうらそ指り言

浮世をよや思ひくみま 道

葉のまよや数ひひのくる上

兼り試り花馬のきりや木の葉時

五種部 沙製を傍

切集せる雪車の子くや雪 沙

山吹の花をちりりそ夕暮しめ

全
修身自注
松江撰

全
尚左撰

全
清原秋房

全
五題

陽炎のたつや土橋の伝夢法

初玉や直道ゆけを丸木橋

紅梅や障子つる夕日影

陽炎の中を牛引く堤可南

ちひさくも眼にまをや 萱草

梅

杖曳のうらやうめある雪まき

入船平はらひて来り初乙名

(鞋)家

聞けゆく國のひらや石の家

明倫社
録其目録
杉江撰

三十一

全 尚左撰

三十二

全 名所

全 清原新少

五題

赤いふく敷つて居るや 白魚賣

紙汗した垣のあうや 踏の臺

日暮うや 筆をあらうて 蛇のふ

山多の尾を引きゆくや 暮庭き

ふ折く 新まをめてく 松の花

野仕る 能煙を休むや 五加木摘

嵐山

よきふきに 松の隈とる さまら哉

和らかな 風の氣味よき 美草哉

朝空をうかうて 着る 袴う車

全 録其目録 杉江撰

全 尚左撰 秀逸

全 十上出集

千鶴の岸

草の戸の木のなかや 不ぬゆ

何ま、ひく角の掬や 鴨牛

あうれ 浮く水に 休む 豚尻 哉

わろ 酔い 立ちこし 花よ 花よ くらさ

岩の 一 耳て 多も 鳴る 花をの 海

心 集う や 筆を さらうて 比の 夢

志を かく 小 流も さらうて 青 空し

まゝ 月の出るよを おし 鳴る 鶉

垣 飲ぬ 宴の そらうて 蓬 思ふ 耶

全 相之園 蓮花撰

梅香全集

香掃名し人撰

明倫彙編
家範典
婦人部

五題 松 燈火

三丁字

香掃名

梅花集 中序

江の浦の客の待つて蓬見しや耶
空をふりまきて暮らして陸のうめ

函館湾の夜素

船の灯の昏りと見えて夏乃海

燈火をいつもめてた——家の四

基の客のくもを殖けり早月而

園に水そげをきや夏の燈

井をうらよ近づき顔や松魚を

小るをふ入まぬと置けよ初機

甲巻 生華庵 学海堂 印

秀逸

咲そめて氣高き梅乃白ひや耶
牡丹のまよのそをりぬ月と梅

雨巻 上
眼をくま夜の始や啼——蛙

丁巻 上

戸のまき名法以入けり初乙鳥

兼題 一見庵 尋香堂 印

街茶屋に人待あふや春の風

生垣に舞や成る襟ふたつ

探華堂 石文堂 印

梅花集

三 遠近多

七 大夢庵字匠撰

七 巻頭

月影よまてしめ置けよ窓の梅
并取にゆいて笑ふや 龍の睡
月曜會日集

花多や隣子ひいてくはりもち

青柳のよもや龍よふ龍の夢

龍の目千揉ふ約束や 女の室

并取にゆいて笑ふ龍の睡

戸のれたすをいさう ちぢしる

七 ささき沙の是ゆるニ砂や風うねる

七 そいつきれさあてふつく 龍をさる

十七字集撰
七 大夢庵撰
七 龍の巻撰

七

七

木のうけやいつく出てありのまの月

つり、吉山下松前
松前信廣公
四百五年
を拜

神風のうねるや松のおとけま

鏡押し功なきいそふうら

留古をこころ 龍の旅や 花の春

送別

いさよまき船をさるや 花の春

題花集、龍、夢、解、衣更の五題を結んで

り者を直はる人と見えや 龍の

七 龍の門を龍

七

七 若丘の上京
送別會の巻
龍

其の青くと花の上那々浅きと
 田堤や花を山城のうらまを振袖
 もたし愛しし身軽も流石に都を
 梅の枝流へるも香もほる草の深
 衣をくして筆種さる春あやしの
 深島に門出をさるこころの葉を
 回恩社友の別れの赤心を好も実
 もあはれををひらまゐる事
 流島の 深海老人の撰

松豊彦の筆を
 看す前々題と
 又て是より白を
 けしと作さる
 のあり可なり

某客大人を
 帰る首を
 ことわきし

題 何をいふも物よこし
 恩愛を脱ふもまさる徳義人
 り是をぬきき旅や花の志
 某客を再び此海を、来ること
 約を待てし
 此夷留古を又刃よこし此幼童以

中央寺金比羅を神の燈籠、下る
 短冊よ

十七字集
香梅左評

全
甲羅全評

全

全
左評

全
香梅左評

全
香梅左評

全
左評

全
左評

香梅左評
二評

清しきおきまぬる家頭山

月やとく祥の五路の光りう那

く毎平一田をわたり新君う那

稲妻お峰を包こし雲百り

稲妻お峰を包こし雲百り

清くまき人暮るまき花火う那

四つづく水争ひや一雪の峰

多勢や牛の膝をたき枝をけ

鼓ももや牛の膝をたき枝をけ

虫の暮白昼の寝る夜とありぬ

花より多こころの動く日けりう那

まぐりんと峰を枝ゆるまむし

水地よそとく岩戸の石をけ

ま秋や志すしこころの川流

豆歌や牛のおとたる新加

世をあく伝や屋瓦と壁一重

さうくと枝をたてる屋瓦う那

是きうと足でるあめりう那

香梅左評
仁の

全
左評

全
左評

全
左評

全
左評

全
左評

全
左評

全
左評

秋風令

一評

川音の夜更てさき碓氷那

十七字集
香坊五評

五

赤くとも日柳一寝き座を成

全

五

さく波もちうる見ゆや月の下

全

二

明秋の月や露けき州乃う

全

二

併初あさうる見えきり魂まう

全

二

此海は原宿の世空を舞ふをえて

全

二

さくさくや雪と見まうふ蟬の志留

全

二

まは違ふ雪のやさや后の月

全

二

役わりを雪うさうて大根成

全

二

あさゆり此夕の抱きもさちう那

秀掃左撰

相中評

秋多の中

十七字集
香坊五評

秋風令

一評

川音の夜更てさき碓氷那

全

五

赤くとも日柳一寝き座を成

全

五

さく波もちうる見ゆや月の下

全

二

明秋の月や露けき州乃う

全

二

併初あさうる見えきり魂まう

全

二

此海は原宿の世空を舞ふをえて

全

二

さくさくや雪と見まうふ蟬の志留

全

二

まは違ふ雪のやさや后の月

全

二

役わりを雪うさうて大根成

全

二

あさゆり此夕の抱きもさちう那

全

二

今うらまゝ家もあり初〜これ

全

二

刃のさ〜も時〜さ〜やあひを〜

全

二

月澄や麻端外を松のさす

全

二

と〜ち〜を秋の白〜小〜可〜那

全

二

彼〜りを雪〜さ〜あ〜大根引

全

二

ち〜雪をち〜さ〜は〜一〜那〜さ〜め

全

二

葉の花や初柳〜小〜家〜一〜道

全

二

羽柴秀吉

全

二

鷲を見て寺〜飛込む〜鷲〜可〜那〜ト

全

二

常盤中尉

生 考内

生 祖内 考内 共進 三

生 考内

生 考内

生 考内

生 考内

明備 考内 後

枝惜 玉松重 杉 杉 杉の 考

隔てれまふ 友よ 哀さて 葉 浪

袴 匠や 文武の 造を ぶこを しめ

部 さの 余りを こしの 浮 振る 中

袴 若や 武門の みちの 踏を しめ

弊 るて ねま 友よ 哀さて 葉 浪

青 磁 藤 福

松 沼の 光り 涼しや 滑 川

大石 内 苑 之 助

岩 部 屋の 埃り 掃 除や ゆまの 朝

生 考内

生 考内

生 考内

生 考内

生 考内

生 考内

生 考内

生 考内

生 考内

海 山も くらゐ 巾着 巾着 巾着 風

初 雪を 散らさ 侍 あそ 一 朝 暮 ぬ

初 雪や ちかき 子 燈を 葉の 使

画 庭を ぬき くらゐ 水 仙 花

阿 波 碓の 音を 別 外り 鳴 ちと け

取 ちと 種 の 子 不 小 小 考 内 部

旧 弊 未 脱

春 来て 古 葉を ねま 友よ 哀さて 葉 浪

あ さ 如 糸 夕の 抱 込 心 ぬ 葉 浪

袴 匠 一 杉 杉 杉の 考

以備能海竹也

全

軸

考抄左

柳の源よとくし 芒の草
山川を下る溪や 霧の中
夏草まきまぬ 青の かゆるか那
澄む地平けうりて 籠舟の丁

舟の間の問く やあふ子引

年かきとあふ (まきおけりもふ)

月さきお 松の古葉もつゆの玉

汲古閣毛骨 (後文)

ふと 酔ふ世活 庵まけり 花の石

一口を下戸もいたく 新海舟

全

軸

全

全

全

全 新多

全 竹兵

全 重題

全 新多

全 初見字

全 新多

全 必り書

地

北海通厚岸湾の世有龍舟 船島船を
涼しさを雪と忍ぶ子 船の端
重所きまぬ 青の 故やうう南

香川 桑樹 (後文)

若しき 大和しき の 桜う那

川舟お甲まひく 水はゆきそ 候

初題 梅花之書

春待つて不ふ 梅の 白ひう那

頂の雪まふの 巻く 雲う那

雪も涼かき けりよ 此の 和

新屋

開

勝

天智天皇 法史

丸木家子 薫り添けり梅の花

山部 赤人

空井より 夢あり 温多崎の時を

持統天皇

歳とりも 花やたのしみ 芳野山

柿本人麿

多心味ひあはれ 大如 柿

将軍より 来る 教の 桂うら

空

持

空

持

空

勝

空

一汗

新屋
開
勝

題

新屋羽子 福妻を 娘と 見 玉子の
五題を 詠む

新玉のとりまゝに 且も 初日の
の 影を 受け けり 福妻を 従ひ 娘
鼓と 典々の 出 氏のを して 勇士
より 引く 初雲 街の 門 候り
娘 妹の 羽を 世に 安ん 門を 幸
福も 金屏よ いろ 福妻 姉 大尾 棚
よ 引く あり 家の 福つきの 娘の 君
曰 何 ほど 候り 言 砂 浦の 昔よ

初の夢より諸君の御叱咤又一入
る方こそしく文章可まきり気は
ひふけめゆいさ一筆とすしれん
甲の年こそ一初を

室梅の志路をや眼も志る不と
言くも何れ流のや一雪の心
相もうらうらと暮持けり空本ら
返けきとくさひれ務や言のち
この室より起る安や東山

室梅の志路を
言くも何れ流の
相もうらうらと
返けきとくさひ
この室より起る

室より起る安や東山

初室より起る安や東山

室より起る安や東山

室より起る安や東山

室より起る安や東山

室より起る安や東山

室より起る安や東山

室より起る安や東山

室より起る安や東山

室梅の志路を
言くも何れ流の
相もうらうらと
返けきとくさひ
この室より起る

十五
新夕

ハナハヤ
花の道
九々の花の道
九々の花の道

表紙
表紙
表紙

人麻呂 (後文)

たぐひなきまの味ひあはれや 大和神

延輝

是悟せぬ神の心しるる言のま

嗣身を祀る

松木した栴那の心子葉のけり

新書を祀る

月能くよき魂ありて花の心も

句布しらくなきととわたりて名を新書

弄月園全

月定色は
して花の
系を
五七の
なりき

廿七年一月の
勅題
梅花之考

此の
社
二十

海はたうて御代の道は一歩はくも道

をを悦ひし

杖たうき松を築りや 智の道

月能の道は交りし門より

海の心はまよひぬや 梅

花を伝ふるは梅の白ひう

はらや 歳万号も 孫く

明てよう 宇方より 花

新文の筆力
かきしつて

明倫歌志
新多

無題

梅

観風
新多

種芝集
三十四

このふの筆力もあつた月と花

梅花の志

さうさう待つてふ梅のふゆ

柴の戸も焼くして難炭卦

雀のうらうらと鼓の棒うら

梅咲てはれ見ゆるや晒し袋

函館五粒郭氷製を時

切果せし雪の車は流るや

さまし咲まけさうさう花の志

冬

名所集
上巻

月日集

明治廿七年

銀婚式奉吟

勅題
雪花秋万春

入船り流るる初し

花の香るこゝの初くひ

花をうけてはるる上

舞のうらうらと笑ふ

生地の舞ふてはるる

志はるるの杯をさす

花の春

萬代や雪花も君々

在東幸如唐
三才物之選
嗣多と新唐
の流さし
るは
りき

在東の備北

嗣多を祝

橋本して葉を梅の白ひ哉

原川新唐を祝

月を花よりつとをれま唐うけ

高橋まきと子稚まきう風雅

志一御酒とよも更妙の琴曲

之花榮道は強煉とて人上教

ゆらよ光雅はまをまはま

やうたりしか不國風邦一の

心地を病の床は法^が一二月
世の流は

九九の鼓めくつ袖のて花のま

と一句を結して身あがりほひぬ

時一年ハ十一歌をいハ散て惜

むハハあさされもかく多枝はし

ていつまあやのれを思ハ古詞

ふさかりきり華とてまのこ

こそあつれ

定悟せぬ袖ぬり一ハのまの

如の

中より御海より申御されけむハ

春もや思もぬぬむ枕哉

松江

大子かゝる子よまゝおろしらす

透るるま枝もあま枝を柳

貝ひろふ人のまげんやまの風

貝ひろふ人のまげんやまの風

夜のおうめ他ぬや字流の量相

かゝるれおほふをある春の月

同佛化

新多

全 全 全

全 全

全 全

名所字流

十七字全

松江原

不三編

香指石

全 全

まの巻

全 全

事難形々

当左所

お右所

福もあやこころ載せる旭の光り

七娘や言も掃く盆のうへ

出てんまハおふをありまの月

健ふ老のを外しや二々灸

出てんまハおふをありまの月

初牛や柳のお戸此の月をまめ

折ふゆまふを外しを花のまけけ

紫の戸もとを思ふて能く卦

出てんまハおふをありまの月

時をぬしは中起をせは名は

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
不夜庵評	初月堂評	初月堂評	色の龍	五題	新多	京都初見乃哉			
新見せられた水の湯ふぬかしのつらね	那をねしよ半遊せざる時をなう那	赤く血の身平昂りねまき青うそ甲	りまゆくささおらあり八重あまこ	笑をせるをねし半やまきの青	那をねしよ半遊せざる時をなう那	樹もゆきやふかきまきや柳月	透りあま枝のまき枝うそ甲		

銀婚式抄題

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
冬之識	修正遍昭	蜂丸	初月堂	十七子集	無名				
出る船り舞う半少や春の海	山の花うつりまき寺も光りけり	琵琶の音を澄らと身もあきら可き	春の空の影りよかけ法に海	那をねしよ半遊せざる時をなう那	がまきまき清き月ようつるをうそ甲	あつたれくあつてはるまき法を茶	美能のさくはるまき法を茶		

美能のさくはるまき法を茶

空低く忍ゆる海女の早く卦

紫陽花をよつり〜とあそぶ

郷く出さハ宝珠心也やもろ松

葉山をおくまひう〜牡丹城

冬御堂

山〜年干葉あふるわや 春の海

船わ〜して高砂の飯鮓を車

白魚六身干草くあまき育ち那

學びや鉄入そめ開く〜地

帯引ておらもあまのちう〜

空

空

空

空

空

海意汗

三子題

三子

山俗杜 秋多

空

三子題

空

三子

空

三子題

番指在日笠保

空

空

引裾り夕。う〜や海〜

う〜り日柳古風干物〜

春細のふ入〜おまのる

出て〜に花ひ直阿あまの月

接し〜てまのる人あり所柳

連のよ〜花おも〜詠し〜るの風

信〜の松をさかひや〜汐千燈

妙〜ま〜ほき眼干〜つ〜る〜

若湯より〜峰の〜ま〜ら〜那

湯より〜の〜ま〜心地あり夜〜月

羽衣風深

空

空

京都御所

空

仙臺花巻宮庭

名 後巻

春巻福井号

名

明倫北竹号

名

名

夏吟山号

忠臣義経清らり 卯五月 改る 呪白や 山月子

川原も更さくあり夏の月

河上りのよき心地ぬる夏の月

噴もせぬ人のたうるやまの松魚

流りて橋引多つや夏の山

見さくは静るこころ蓮の花

裸火の流もよるるは松の枝

鬮引て茶をいせさせる涼と秋

山たのしき夏を気味り 山の者

を 後巻

二五月 松きうて敵心祈るや君々を

三五月 切りかけさうちと移けつる葉風

四五月 飛鷹の羽風を花のちんぷり

五五月 鉄炮の上腕も志のるや五月の

六五月 心籠り入りて勤るきんりく

七五月 文をえたる灯火の夜も外

八五月 都見たる女の旗や 花のま

九五月 天八の音りさくるを葉の秋の風

十五月 夜もよるを越えたる唐のし

十一五月 春物初め 埃り掃除や 雪の影

紀貫之 秋

紀貫之

紀貫之

紀貫之

日毎清く船乃涼しやお侍の海
柑子の石や抱うせて嘆ふおわ
涼しきや竹のそよまきり舟の月

松の實

(洋館に於て松の實を採りて煮て食ふ)

新夢

此のや花よりも此のやの實

新夢

多の事さや松葉こころもや若しつ

照のさめて忍れ名舟外り行ふ

こころの流るうつる以後うね

なるよま舟のちうそく船のうね

潜る海

田の水の静く白ひやをり峰

ふもとの海に唐草は花や風を

雷のうつりておやをり峰

舟にささりてカサ月を

鯉を飼てぬきおやをり峰

雪のうつりておやをり峰

川せらば枝川外りてをり峰

川おや御ま度の握り

傍り色魚の煮るや心た

香の海

香の海

香の海

〃

関らるも一ツの君も動き分る

〃

晴さして居るは耳を初松の魚

〃

さし鱗お若くぬも睡のうへ

〃

山依の法螺貝を吹せし一ツの卦

〃

眼のさめてるは舟のこりこり

〃

舟の時舟のちりさく一輪のつら

〃

うき舟のくまのふくま木らち卦

〃

裸足の流まうつるは後う那

〃

舟の時舟の塵をくあふま卦

〃

葉の友のとねはらりして蓮のつら

〃 新多

〃 舟の

〃 舟の

〃 舟の

〃 舟の

〃 舟の

〃 舟の

〃 舟の

〃 舟の

〃 舟の

月まをちい重の舟をそありる

月まをれいん舟のやをそありる

田に水の乾くはひやをのこりる

鯉をねてぬきまをそや夜ゆら

あゝためて音のまをそや花の鐘

舟の毒世をそねをそ

まゝとつら舟をそい日のまをそや新や

美只家大人

新屋を

一とをそ

舟の

舟の

舟の

舟の

舟の

舟の

舟の

舟の

舟の

舟の

我陸軍の勝利

大志の羽也に折さつけしは
雷のついでにや重のこ
人浪の中に渦を角カリ耶
傍をころりよるこそ
志す路に夜をわくしと
月さしてあつとく又えぬ
心澄とまきりて
試みるにせし
志す事あり

京都御所
永野

香折左目
三十一日

中井三氏

京都御所
永野

香折左目

中井三氏

曲水

香折左目

香折左目

香折左目

香折左目

こころのこころのこころのこころ
松葉のふもとの松葉のふもとの松葉
まつたの松葉のふもとの松葉のふもとの松葉
色うの松葉のふもとの松葉のふもとの松葉
石折川の松葉のふもとの松葉のふもとの松葉
鮭細や松葉のふもとの松葉のふもとの松葉
葉山を松葉のふもとの松葉のふもとの松葉
顔に松葉のふもとの松葉のふもとの松葉

十文字集
香梅屋評

香梅屋評

香梅屋評

香梅屋評

こころをいへしとあけり月は秋
 曉乃水音さふし秋の樹
 後の月たりけき秋をてふしけり
 よひきえともかさめて后の離るれ
 稲妻や羽をとくま直き樹鳥
 山忍ても海忍てもより秋の月
 追もて平訓てのこし稲穂
 山忍ても海忍てもより妹の月
 不目あま家も秋乃夕うね
 葉の艶に殊よこもし叶の雲

香梅屋評

新多 仲秋

京都初見
新多

こころをいへしとあけり月は秋
 上は平追もてさふし秋の蝶
 夕夕けて追く足ゆるや秋の山
 曉の水音さふし秋の樹を
 不二きうをいへし秋のあけり
 秋の月たりけき秋をてふしけり
 秋の地をていりり雪の歌
 秋のけの雲をいへしと青卦
 法の上は小舟の舟の肌さひり

や井茶紙十四

越後巻心會

を

春秋稿

を

を

を

の倫教誌

新書

はらふに園扇おけは相比ふ系

神棚やおさら言り置くやもち庭

稲つまにかいつくあひぬ窓りを

押しのく本戸よしてあや梅子日

室低くさゆゑ活生の量り裁

智引して松も夢のなうりか望

出たてゝ守刀やさつまし晴

寄 霞懐舊

むさしのお昔の露を家あり鼓

日清開戦大勝利の確報をお祈りて

大寺の羽ぬき折さう習栗坊

まのり号

松の能咲きまて庭のま入う時

又ひとり奥の庭おけり秋の風

新と暮る年のいきれやし雪の峰

川かりや俄さる度の子さうあし

細ひく家ひとりあり 栗古鳥

。 。

井楳のぬきさうさうや初しを

園栗もむらへさうさうし 山 遊氏

を

後史

を

五題

を

集

を

春秋稿

三巻 巻石印時

を 春秋稿

香印石評

名 伯羅志之評

名 桂家之評

名 石川之評

蛇とめて沿岸光る月夜
くろくも実りきりけり
竹撮のぬきこもうや初しとれ
會舞も程の宮れし
こころよ一葉刻もや
竹撮のぬきこもうや初しとれ
おと川ぬきこもうや初しとれ
此の家がええて道ちききとれ
竹撮のぬきこもうや初しとれ
暮もえりまきけり初しとれ

名 新馬

名

名

名

名 古坂連集

名 秋

花をまき代りよとけき
名 葉が

名 侍兵

ゆき初かきけりあそび
里とともや遠つくもつて秋の暮

名 勇兵抜刀隊

稲妻やまよもまきて日帯刀
空けけき宮待りあり初しとれ
とく風ふ能飼里の小をうれ
初きくの落くもあぬ白ひうれ

以修其法
新法

石印の経海をる

左慈 法受

涼しきや洗ひ纏のあぢあひの
山先剣て江の岸走る月夜うす
老の身も當るを助る心その
葉舟力杖もおもひぬ安けり
馬つまゝ杭も一つとん不う
美しう水もたそけりお葉船
寂しうの山家たいて月をた

名 名 名 名 名 名 名

名

名

七字の
七字の
七字の
七字の

名 名

名 名

名

名

如月や地をそしりゆく雨より乾

名所 武蔵玉川

玉川や水ゆく方子風かをる

牝の舌をもきて白くや葱しる

籠ててみち幅狭し 江戸の

よく徳る櫓も操懐かひしくうす

名 上

ふくしき草糺らての物このこ

羊蹄山

阪東の雪を新ももちち

七言集

帝國萬葉

陽きくの如きりとる花 五七五

柳より

四月廿八年 丁卯三月

見立の字色

大なる平聲ひらけきり初まふん
深山ふ枝もまきれぬ柳 花
忙しき不とをけきありの年あ

全市五五五
七言集

まけんよくまうし 花あり居る種の花
幹ふとく枝配りよ 梅の花

少存五五五
七言集

美うし 花あり 梅の花

七言集

忙しき不とをけきありの年あ

七言集

薄沙たけけしつと浦の水も花

阿しきもれさぬ花の羽あり

水儂お二人を横き竹の橋

ふ二をゆき窓はふさうも冬心花

を したる枝のゆつるや雪のそ

梅の宿む家と静お沙走車

花の心は外にあり 河豚汁

堅城鎮壁と持て
たふさ順口も僅に
所居を流す

萬古評

毛方流評

氣衣忌言佛心とけり
管をめて空の島山のそきけり
このよ富も家ハ静ハ所を越
水標也二人ハ狭き味ハ乃標
もち橋や女もけり此ハ夢
西のりや黄を飛ハ火のさ苗
流の夕たくけりも浦乃ハ
これれも濡たより外ハ都
江ありと障子ハ書ハ冬梅
関上ハ夢もれけり雪のそり

明倫記

巴山評

新多

空井記

香梅評
名
名
名

風船のいれもりてては船の秋
大空ハ静ハけり初ハ
船風ハ乗ハ毎明や老ハ海
船もハや刃もより早きをり
八重たつ社ハ八重ハ書ハけり
藻のちりハ取ハたハ船ハ魚
舞船の下ハ引ハ者ハをハ書
志ハ魚ハかハりハ果ハるハ月ハ夜ハ
昔ハ舟ハのけハりハ勅ハく柳ハ
遊ハくハをハ遊ハひハてハまハつハ乃ハ

丁未年

潜

心孔引て忍も根強きいまる
 帆の沖にまをりて海に雲けり
 徐に日なたきうれて梅の香
 黄を如細月をあけしは粧部屋
 不孝忍ゆる室をさしは屠種^蘇の
 舞鶴のゆり隈に初を
 大曲をよせたるは白魚賣
 うめ咲て善清の柳船うら
 風ゆる水に志しき柳花
 七種をよせたる詠もうたひあり

不孝忍

王名

うめ咲て善清の柳船うら
 風ゆる水に志しき柳花
 ふ二忍ゆる室をさしは屠種^蘇の
 まつ水に志しき柳花
 越をよせたるは白魚賣
 大曲をよせたるは白魚賣
 一二種をよせたるは白魚賣
 初白海に錦をよせたるは白魚賣
 餌をよせたるは白魚賣
 吾や人の浪しる船あり

不孝忍

初題

吾や

○ 清亭
おき評

山よりちりぬるちり花の光の那
陽突やお砂り芽をぬき圃ひ栗
とりの花さうぬ里なき世並う那
學まなのまなやまなのまなを袖のまなた
言ひけて又標をぬきやまなのまな
凱旋をまらうもぬゆる神うれ
申窓干うつる火影やまなのまな
あ心よりの鼓築つる海走うれ
海ありと障ふよまて冬こもり
冬木を月をはさむてぬよりり

まな
松幸

五五

まの知沖

ほろりひて巻り定ぬるの梅
嵐もみたまぬ鷹の羽うり卦
須戸の石只一副をのかきと卦
年高の聲と聞えう若葉奏
ふよをぬせぬさゆさう門柳
碓の利た鮎よ室も梅足うれ
不二忍ゆる室も碓もや屠蘇の味
振袖のましに出て掃むる若葉卦
言の葉のたまも標ぬらぬうれ
うけうらや砂も身をそく圃ひ栗

夜月評

京都
西行評

夜もさうさう志さしと原月と梅
 比若葉よ濃の花も白ひかり
 川原をさう詠出りや梅の如
 短夜よ初和魚
 短夜といひ詠更に叫ぶれ
 川をひそそめおれ梅の如
 世の人能くさう勸めさう詠
 分入る花年心のなまきり

まき果 香露

解月巻

大ゆさひさきさける牡丹うれ
 花の雪を夢をまねるそひえけり
 踏ハ志さし雪の如くうれ
 雪の如くさう詠出りや梅の如
 さう詠出りや梅の如くうれ
 干綱をさう詠出りや梅の如
 こゝの夜もあつたのう水の色

まき果

ひまの卯毛 水雷船

寺の名も竹てあつむらつ葉うれ
背中まきし風もまきもや 浮みあり
言あけて又探直まきや 老の面
大寺少将を吊りて

馬廻新造

浪連集 十四

うつしき 新新新をさくらら本
葉垣をとれま出て来る 葉垣本
解念あま 問うもあり 雛の家
いよれまきまき 白魚賣
梁山崎まよひうして 牡丹うれ
相ひく家ひらつあつあまも

平手義

平手集 治船

平手園

平手

まじりて海わたりわき葉うれ
留後平老能風名たく田こまう南
葉あけふりの白ふお甲やまきま
るやうまきまき 葉はかつうり
留後平老の風を横く田植うれ
大寺 とうまきまきまき 通うる
格越せお阿もありうまきまき
こまねも 葉まきまき ぬ葉柳うれ
暗まきまきまきあつて 田植うれ
向あつて 葉まきまき 羽振 鳥

香梅

故情つらてふ秋ふれぬ亭中さ

秋意

露さしる結いぬ味より葉の白

新

新しき字もうけて風短葉う那

新

新しき字もうけて風短葉う那

上子集 香梅

垣根しげ降たやうこをうを

月ありて夜もさわうしき様

志のそれぬ春のあをれや梅のこ

吹まうて梅邊葉よをけり

をうけつさるや冷く水のう

八葉の心ゆふにけり新まき

對松亭

香梅園

うれてハ船走ハ出さや船の福こ

をうけつさるやぬき水うう

杉杉もさるは是り能治をうれ

花らかり夜もあまうてハ遊う中

月ありて夜もさわうしき様うれ

いそれも春をよ種 白魚羹

とぬ年もなるとまこし様うれ

月の出く夜もさわうしき様う中

そり砂のとつれとゆうや花をん

あき散まハ遊をさるうれ

大寺少將

香梅

ひまゆき

十文字集

香島

海苔や砂を舟を山をかこむ栗
 垣根たけ障たけをうき雪
 去手築山も出しくや路の巻
 朝面をふめて見おれや 初春
 松風の宮よ静ありそよまに
 危くも思えてたぐみか浪葉を
 松風を神の物とし交をい
 うめ干のうやけ少田原を
 松風の神の姿々交をい
 大舌鼓やまこ心を道しけり

泊船

不夜亭

とろろ

文の山松風を舟で登りけり
 舟にさし揚をいとお渡り船
 幸崎り船をいめて沖をま
 文の山まら風を舟で登りけり
 舟にさし揚をいとお渡り船
 門外れに巨唐茶屋ありの巻の巻
 ひまゆきとまよきとて夜春
 舟にさし揚をいとお渡り船
 巻砂のうつれとまよきとて夜春
 舟にさし揚をいとお渡り船

春の巻

巻

十文字系 新多

樺山台湾總督

松島屋中
三ノ月 第六回

芝野屋 松島屋

香島屋

舛しくの戦きをわけて青いし
開とりの座も動らぬや 登一ツ
華上のせとひるれを初あし
よみ水の湧きもあつた本を
信よしの松のりるよ 沖 鯨
涼しきよ上り惜むや 海一船
火車のうねさをさるる 画一子
舟鉾や人浪分て曳渡る
松尾の神の物る 友をい

芝野屋 松島屋
五都中并義
十文字系
石堂

松島屋

舟のりて 老のゆを替く 田植本
大出鼓 海あつたを道し けり
登一 たるよ涼し 接る夜本
以程 してさつをり志し 心うれ
何 木本を少楯よりて 照射る
ま 松の字法
難の宮 松よりるめて 居りけり
何 水本を少楯よりて 照射る
何 あつて 松ありて 風をりる
船の灯もええり 涼しき 二 以うれ

桂五

とれさうあきさうや川おろし
 心もろと交をもれせう富士詣
 月神一流きハ魔のうら表
 竹あうておあうて風かきうら
 ふ何のまてさつませう田植うた
 友の川はくくりかめさつつけり
 ときしさとや冷き水の流所
 うら水や所をささるる置り
 ふ何のまてさつませう田植うた
 在函館御坂某の許に歸りたることあり

五

ほんま
 古歌
 ふうん
 ふうん

産後肥之所ハ地まうけき
 抱てな一蒼ゆ一は花あやめ
 味もも目をかきれて初詣
 せりくと風やうけりあき部
 朝露もふのハ氣味よ一葉の白
 軍人更衣
 凱旋やかちりし條のころも更
 ひふの御道を通りて
 御道や風かきさうてくらのうら

ひさの卯を
新あし

と
聲書
加ふる洋

和通大川
赴くを
して

一の
うの
うの

てと

あま

水

武蔵の川

武川や水ゆるかたよ

何とぞ少袖よりひの

杉そのまゝ家や

流川のきもきし

錦 忌て

ひらちて

月の名部

替

月の名部

名月や

月の名部

又流せる

松葉

ひと

一夜

海

うら

高尾

松の多しつゝの浦のまぬゝ
海まゝも深く音ある

黄葉

閑を仕ぬ鹿千接くれぬ

京都温知會
時百念の句

中井を
新多

叶くの深世もそは枯をさ
屋根の雲すゝりよ春の物ま
空屏子うららかにやさくら

淋しさを猫抱こむおれ
初とめて笑やゆらま

古
泊船を
汗

別荘もあまて牡丹の根はけ
れ

生
佛石洋

月のまもりの昔をかくる

そととて徳と更をや
あは乃月

さあやまき覚悟てまを
新酒を

葉のれそつておんや
志き杖

更とさをしき一夜を
るの月

さあやまき覚悟てまを
新酒を

まもりのむそつてまを
や志き杖

まもりのむそつてまを
や志き杖

うらねりぬの渦まを
な葉を

高尾の洋

高尾の洋

船中記

桂直之入洋

多の屋洋

隣へも白ひさきしれど砂塵汁
 音れしと昨夜の雪の積りし
 うら堀も風のうらまきと夜葉の
 更なる幸し岩壁をうけてけり
 口切も妙慧の古事も聞よけり
 ともし解るる世とわかれぬ冬
 夜中のうね岩壁をうけてけり
 隣へも白ひさきしれど砂塵汁
 身のしるも不ふ白さや冬牡丹
 うら堀も風のうらまきと夜葉の

又新集 松江洋

生 江記洋

隣へも白ひさきしれど砂塵汁
 うら堀も風のうらまきと夜葉の
 二 三輪のうねり 問のあき 橋のうね
 葉原のうらまきと夜葉の
 林のうらまきと夜葉の
 山もほちけり うち春の光る葉
 乙多のやうな風もむらさきの
 ニ 三輪のうねり 問のあき 橋のうね
 年一冬の夢とやえぬ 美 藤のうね

又新集

又新集

又新集

又新集

又新集

又新集

月の霜一つふ人のそらひけり

秋の夢さそふたよりや 舟泊り

新しく湧く清水や不二のうけ

や、さふく水も澄たる山のうけ

秋の夢一つむく浦のきぬたを

後かき月夜州なるや もろく將

存くく道き、叩て足もやせらの月

外荘のこまて牡丹の根分りれ

賑ふちるふとさふく 虫のさ夢

り秋やよきハハよつ虫儀もの

白

白

白

白

白

白

白

白

陽てれま日の隔りさす秋のゆき

威海衛と頌歌體整使れたる性報

を問へ

東風かきや依り疎く厚くあふり

月影のほくそかきもや 群の梅

まろくはれ白雪ハハをかくしけり

閑たなれらるるふれふかぬ旅路を

驚のあふれ振るや 群の馬

思ひ振を裁交さすもふちこの那

この上乃ちつ拍をれ せと米

近風新志

新多

少院考評

万教評

物題寄山祝

西京風土園臨院
字区洋最巻

高の卯迄
新多

生

秋懐の秋

花おそく代々もまやまぬ多うら
こころも忍しハ露あり月の秋
こころも忍しハ露あり月の秋
おろるるも叩いて見えぬ月の門

うたよたふた山より久し君のま

言の葉も艶もほけけり衣破り

帷の山麻まを印度と見えぬ

人のこころは遠くはあきさう那

十七子集

操花尾評

東洋考評

東風庵評

満堂評

新多

香梅在評

生

遠風園之遊

美魚——こころも君の戸のうら

ひろげてもよそよそなれ——餅むら

賤く家の自然の屋敷石路のま

まつゆめのれ——さよ眼のせつかけり

道葉乃言向ふもさき物ゆのれ

うとひまや障子一枚あももよ

氣ふさやう巻を替乃ゆまま

ゆめも——うそをうらる雲のれ

雪や黙て居れハあし来り

里よりやうとひあつて涙は

破音撰

思字撰

花よ女喜乃葉きや梅柳
 よま枝の物く殖る柳葉
 けし草をこのよの家れら柳
 仮しーや柳くく人か
 雪のうきとけりけり白うし
 花よ女をよめきや梅柳
 花光さつそや出舟きさ
 花よーや柳くく人か
 沙比白ふ浦家り干籠る
 葉葉き梅を好よ山江ひ

白形撰
きり巻撰

白形撰
きり巻撰

白形撰

花よ女喜乃葉きや梅柳
 よま枝の物く殖る柳葉
 けし草をこのよの家れら柳
 仮しーや柳くく人か
 雪のうきとけりけり白うし
 花よ女をよめきや梅柳
 花光さつそや出舟きさ
 花よーや柳くく人か
 沙比白ふ浦家り干籠る
 葉葉き梅を好よ山江ひ

玉題 玉題 玉題

玉題 玉題

玉題 玉題

おのれや川海ありまきの風
口つ橋きりさつ橋くぬをの月
いそよ船小をのりき 飾りく
さふ せはるはれぬ せよ雪の如
第久 せの二十りの船よりも
忽ちと裡おろりもひとまふりぬ
昔ふりぬて昔くり 秋のふ
眼をとちて 破せは在まよふ魂
とふ せはれとふ せはれ
くはたまはるぬ 夜に神 くれ

磯の船小をのりき 飾りく
いそよ船小をのりき 飾りく
さふ せはるはれぬ せよ雪の如
第久 せの二十りの船よりも
忽ちと裡おろりもひとまふりぬ
昔ふりぬて昔くり 秋のふ
眼をとちて 破せは在まよふ魂
とふ せはれとふ せはれ
くはたまはるぬ 夜に神 くれ

ひらひらと花はくはし 後の日
磯の磯のふきかけしきほり
はまきりや念のわたる夜さうち
ゆりける夜のほれくやなやま
くはれよふ日 祝と神しんれ
ひ如きあまきとるあ老のちしほ
さつしをえめて正まや舟の福
磯の磯のふきかけしきほり
ちまれの雪よりこるは時とれ
あまのよるふてとれけり 社の燈

送る大の海にさむしき戸のうれ
あまの雪と知て右左をと 社のうれ
白のみのりさうし 神しんれ
磯の磯のふきかけしきほり
よき山よふきききあまのふき
磯の磯の 牡丹の根とけきほり
ちまれの雪よりたをさしんれ
うまの踏まぬ道より雪のうれ
葉もくし 七のちのり花よる
雪のうれよふ日 祝と神しんれ

彦右居士
 石居
 破洋の文洋
 生並の文洋
 新原の文洋
 泊船の文

舟の踏のこりりこりこり
 ちきりりゆりゆりこりこり
 多一羽を横切るうき船の
 夜さのま向とあさん踏の
 花のまき糸のたみ糸の
 舟戸川や布梅の舟
 舟戸川や布梅の舟
 舟戸川や布梅の舟

新原の文

新原の文

明倫雅志
新原

遠きかきや
 雀もや松をれさるあはれ
 舟のまき糸のたみ糸の
 舟戸川や布梅の舟
 舟戸川や布梅の舟
 舟戸川や布梅の舟

回廊の法華

五題

五題

五題

五題

霞その花をよみし音もかきし
た若し葉よりけり花かつを
旭をうけし猶うきもれ梅
峰山をへたてしあたし
之砂の松をよみし音もかきし
時よきも顔うつまや鏡もち

終

歌川以州

七下

竹 六下

歌川以州

